

## いざこぎの発生と解決過程の発達的検討 —3歳児と4歳児との比較—

田中 洋\*・阿南 寿美子\*\*

**【要旨】** 本研究では、自由遊び場面において同一集団の子どもを3歳児から4歳児まで継続的に観察し、1)いざこぎの解決過程における原因・終結・方略、2)いざこぎの解決事例における方略、3)いざこぎの原因と終結との関連について、年齢別に比較・検討した。その結果、4歳児では、いざこぎの発生数が増加すること、所有の意識が高まること、自身の不快な感情に気づき他児に表示することができること、他児の感情を推測できるようになることが示唆された。ネガティブなまま終結することを避けるために、主に他児を受容することによっていざこぎを解決しようとしており、なかにはおどけやふざけ行動を用いることによって、いざこぎにおいて発生したネガティブな感情を解消しようとしていることが示唆された。3歳児では26事例のうち6事例、4歳児では81事例のうち38事例が解決事例となり、4歳児においていざこぎを解決する社会的能力が発達していることが明らかとなつた。

**【キーワード】** いざこぎ 方略 カテゴリー 社会性の発達

### 問題と目的

幼児の社会性の発達において対人葛藤は非常に大きな役割を担う(Shantz, C.U., 1987)。大人との相互交渉の中では、大人が相手となる子どもに配慮するため、問題が生じたとしてもあまり抵抗や葛藤を感じないままに解決することが多い。それに対し、子ども同士の場合はこのような配慮が期待されないため、他者との葛藤の際には、相手の視点を意識したり、感情を推し量らざるを得ないような状況に巻き込まれる。こうした状況での対人的な経験が、子どもの社会的な認知の発達を促進させるのである(臼井, 1994)。

このような社会的な葛藤場面として、多くの先行研究においていざこぎ場面が取り上げられ、その発生頻度や争点となる原因、解決のために用いられる方略、終結などに年齢差があることが明らかにされてきた(木下・斎藤・朝生, 1985; 朝生・木下・斎藤, 1986; Shantz, C.U. 1986, 1987; 倉持 1992; 高濱・無藤, 1999)。これらの研究の多くは、横断的な観察に基づく年齢別

---

平成20年6月2日受理

\*たなか・ひろし 大分大学教育福祉科学部

\*\*あなみ・すみこ 別府溝部学園短期大学

の特徴を明らかにしている。

阿南ら(2008)は、3歳児から4歳児前期へ継続して観察を行い、年齢別に原因・終結・方略の特徴を明らかにした。また、いざこざの関与数に個人差が認められたことから、いざこざの関与数の変化の仕方により3つのタイプに分類した子どもを抽出し、質的な分析を行うことによって、いざこざの解決過程ではタイプ別に質的な特徴があることを明らかにしている(阿南・田中, 2008)。そこで、本研究では、阿南ら(2008)の対象児を更に継続して観察し、3歳児と4歳児後期におけるいざこざの原因・終結・方略を比較することを通じて、両者間の発達的差異を明らかにすることを目的とした。さらに、解決事例において使用された方略と各観察期における方略の推移、各観察期における原因と終結の関連もあわせて検討した。

## 方法

**観察対象** 2006年:大分市内の私立保育園の3歳児クラス19名(男児7名、女児12名)を対象とした。観察時の平均月年齢は4歳4か月( $SD=3.35$ か月)、年齢範囲は3歳8か月~4歳7か月であった。06年度に観察した子どもを継続して2007年も観察を行った(4歳児クラス)。07年における観察時の平均年齢は5歳5か月( $SD=2.05$ か月)、年齢範囲は5歳0か月~5歳7か月であった。

**観察方法** 2006年10月16日~2007年1月15日の間に週に1回の割合で観察し、計11回9.5時間の観察を行った。また、2007年10月15日~2008年3月25日の間に週に1回の割合で観察し、計14回9.5時間の観察を行った。子どもの自由な相互交渉を観察するため、概ね9時20分~11時00分までの自由遊び時間に観察した。クラス全員が観察対象となるように30分で観察児を交替し、1回につき1~2人を観察した。観察は第2筆者が保育に参加せず「観察者」の立場をとり1名で行った。観察時における子どもからの働きかけに対しては「観察者」の立場をとり、積極的な働きかけを控えた。観察方法には、子どもたちの比較的自由な相互交渉が観察でき、クラスの子どもたちを均等に観察できることから、自由観察法を採用した。観察時はビデオカメラを使用して子どもたちの相互交渉の様子を録画した。

**分析方法** ビデオカメラで録画されたデータを分析対象とし、周囲の状況や音声データの文字化を行った。分析する事例は、ある子どもが他の子どもに対して不満・拒絶・否定などを示す行動を発話や動作・表情で行った時点から、そのやりとりの終了までとした。文字化されたデータを元に以下の分析を行った。分析に際しては観察者と第1筆者で協議しながら行った。

**分析項目** 各事例においていざこざを引き起こした「原因」、いざこざの終了を示す「終結」、いざこざ過程で使用される相手を納得させるための具体的な手立てを示す「方略」の3項目を記録、分類した。

いざこざの「原因」、「終結」、「方略」の分類に際しては、阿南ら(2008)の項目を参考にした。その際「方略」において、友達に対していざこざの状況を説明する手立てを用いていたことから、「g.先生」と分類していた方略を、「g.告示(先生・子ども)」へと変更した。

## 結果および考察

06年(3歳児)の観察において44事例のいざこざが観察された。そのうち、同年齢の第3者

が介入した 5 事例、異年齢の幼児を対象とした 11 事例、第 3 者が介入しかつ異年齢の幼児を対象とした 2 事例を分析から除外した。従って 26 事例のいざこざを分析対象とした。07 年(4 歳児)の観察において 86 事例のいざこざが観察された。そのうち、同年齢の第 3 者が介入した 3 事例、異年齢の幼児を対象とした 1 事例、第 3 者が介入しかつ異年齢の幼児を対象とした 1 事例を分析から除外した。従って 81 事例のいざこざを分析対象とした。園児一人当たりの平均事例数はそれぞれ 1.37 事例、4.26 事例であった。

### 1. 各期におけるいざこざの原因・終結の特徴

3 歳児と 4 歳児の各期に観察されたいざこざの事例について分類を行い、原因、終結において、その事例数と各期の全事例に占める割合を示したものが、それぞれ Table1、2 である。また、方略を分類し、その頻度と割合を示したものが Table3 である。

いざこざの原因是、3 歳児において、「遊びの一環」が 53.8%で最も多く、次いで「拒否・拒絶」、「イメージのずれ」、「接近」が 11.5%と多いことが示された。4 歳児では、「物の占有」が 26.0%で最も多く、次いで「遊びの一環」が 20.8%、「イメージのずれ」が 11.7%と多いことが示された。両期を比較すると、3 歳児ではみられなかった「否定的な行動」が 4 歳児ではみられるようになった。

各観察期におけるいざこざの原因別事例数を  $\chi^2$  検定で比較すると、「物の占有」が 1%水準で有意であり、4 歳児においてより多く見られることが示された( $\chi^2=8.84$ , df=1)。また、「否定的な行動」、「決定に不一致」が 5%水準で有意であり、4 歳児で多く見られることが示された(それぞれ  $\chi^2=4.67$ , df=1 ;  $\chi^2=4.00$ , df=1)。「妨害」は有意ではないものの 4 歳児において多くなる傾向が示された( $\chi^2=3.33$ , df=1)。

「物の占有」のうち、3 歳児では 2 事例ともに砂遊び場面での道具の占有権を主張していた。4 歳児では室内でのブロック遊び場面において 8 事例が観察された他、粘土遊び場面等での事例が観察された。また、「否定的な行動」では、4 歳児において 7 事例のうち 1 人が 1 事例、2

Table1 各観察期におけるいざこざの原因別事例数

			3歳児 (%)	4歳児 (%)
①-a	物の占有	不當に相手の物を取ったり物の所有について主張する発話等	2 (7.7)	<** 20 (26.0)
①-b	場所の占有	不當に相手の場所をとったり場所の占有について主張する発話等	—	2 (2.6)
②	人の独占	先生や友達を独占するときに起こる	—	—
③-a	否定的な行動	身体攻撃、非難、悪口、行動の妨害等、相手にとって不当な行動 相手が否定しなくても原因と考える	—	<* 7 (9.1)
③-b	無視	ある子どもの恶意のない提案、依頼に対する無視	—	1 (1.3)
③-c	拒否・拒絶	ある子どもの恶意のない提案、依頼に対する拒否・拒絶の発話、行	3 (11.5)	1 (1.3)
③-d	反論・反発	ある子どもの発話、行動に対する反論・反発の発話、行動	—	1 (1.3)
③-e	遊びの一環	ある子どもが相手に遊びの最中に悪意なく行った遊びの行動 相手が否定した時に原因と考える	14 (53.8)	16 (20.8)
③-f	不當な要求	相手に対して、からかいや言いがかりなど不當な要求を行ったこと が原因と考える	—	—
④-a	慣習的規則違反	一般社会や園、クラスで定められている規範としての規則、遊びの 上のルールに違反する行動 相手が違反と決めたときに原因と考える	1 (3.8)	3 (3.9)
④-b	恣意的規則違反	ある子どもの客観的には規則に関わらない行動に対して、相手が 個人的に定められた基準によって規範を主張するときに原因と考える	—	2 (2.6)
⑤	イメージのずれ	ある子どものイメージに基づく行動が相手の個人的イメージと食い 違うときに起こる	3 (11.5)	9 (11.7)
⑥	決定の不一致	遊びの内容、役割等を決めるときに、互いの要求・主張が対立する ときに起こる	—	<* 6 (7.8)
⑦-a	接触	ある子どもが偶然接触してしまい、不快をもたらしたときに起こる	—	2 (2.6)
⑦-b	接近	ある子どもが接近することによって相手に不快をもたらしたときに起 る	3 (11.5)	2 (2.6)
⑦-c	妨害	ある子どもが偶然遊びや行動を妨害してしまい、不快をもたらしたと きに起こる	—	<+ 5 (6.5)
			26 (100.0)	<** 77 (100.0)

註)・表中の数字は各観察期における当該事例数を示す。

・カッコ内の数字は全事例に占める割合をパーセントで示したものである。ーは生起しなかったことを示す。

・不等号は  $\chi^2$  検定の結果、各観察期間で事例の数が有意に異なることを示す。(有意水準: $+p < .10$ ,  $*p < .05$ ,  $**p < .01$ )

人の子が3事例ずつ原因となり、友達に近づき叩くふりや行動の妨害を行うなどによっていざこざが発生していた。「決定の不一致」では、ごっこ遊びなどの遊びの内容、例えば【お母さんごっこ】をするのか【家族ごっこ】をするのかなどの場面において3事例、役割分担の場面において2事例、その他、順番を決める場面において発生していた。3歳児では4歳児において「物の占有」や「決定の不一致」等のいざこざの原因となるような同様の場面においても、相手の行動に対して全く反応を示さず、いざこざとして成立しないことが多かった。

以上より、4歳児では所有の意識が高まるとともに、自分と他児との物の区別をすることができるようになっていることが推測される。また、遊びの内容や役割分担などについて自分の考えを持っており、相手と意見が異なる場合は、はつきりと思いを表すことができるようになってきているといえる。一方で、特定の子どもが他児に対して明らかに嫌がらせと思われる行動をし、相手の反応を楽しむかのような様子が見られたが、これは他児の気持ちを理解した上で行われるネガティブな働きかけであるといえよう。

いざこざの終結は、3歳児において、「無視・無抵抗・泣き」が26.9%と最も多く、次いで「ものわかれ」が19.2%、「自然消滅」が15.4%と多いことが示された。4歳児では、「譲歩」が48.1%で最も多く、次いで、「自然消滅」が27.3%、「ものわかれ」が16.9%が多いことが示された。両期を比較すると、3歳児では最も多かった「無視・無抵抗・泣き」が4歳児では全く見られなくなった。

各観察期における、いざこざの終結別事例数を $\chi^2$ 検定で比較すると、「譲歩」が1%水準で有意であり、4歳児に多く見られることが示された( $\chi^2=17.64$ , df=1)。また「自然消滅」が5%水準で有意であり、4歳児に多く見られることが示された( $\chi^2=6.54$ , df=1)。同様に「無視・無抵抗・泣き」は5%水準で有意であり、3歳児により多く見られることが示された( $\chi^2=4.67$ , df=1)。

Table2 各観察期におけるいざこざの終結別事例数

			3歳児 (%)	4歳児 (%)
① 無視・無抵抗・泣き	相手の不当な行為に対して抵抗や抗議を示さずに、無視・その場を立ち去る・泣く等、無抵抗のままに終結する場合	7 (26.9)	>*	—
② 抵抗	原因行動に対して、相手の簡単な反応行動をするだけで終わる場合	—	3 (3.9)	
③ 自然消滅	原因行動に対して相手の不満が示され、いざこざのやりとりが開始したあと、謝罪・相互理解などの明確な解決に至ることなく、何となくいざこざが終わり、そのまま遊び始める場合	4 (15.4)	<*	21 (27.3)
④ ものわかれ	いざこざのやりとりの途中で、一方の子どもがその場を立ち去るなどの行動で不快を表し、いざこざの継続・和解の努力を放棄し、未解決のまま終わる場合	5 (19.2)	13 (16.9)	
⑤-a 謙歩	相手の要求を理解し、納得して受容する場合	3 (11.5)	<**	37 (48.1)
⑤-b 圧力への服従	一方が他方に不当な圧力を示す行動に出たり、一方が納得しないまま他方の圧力に屈することで、いざこざが未解決のまま終わる場合	2 (7.7)	1 (1.3)	
⑥-a 先生への依頼	いざこざの当事者が先生に援助を求め、先生の介入で終結する場合	—	—	
⑥-b 先生の介入	先生の自発的介入によって終結する場合	—	—	
⑥-c 子どもの介入	当事者以外の子どもの自発的、意図的介入によって終結する場合	2 (7.7)	1 (1.3)	
⑦-a イメージの共有	イメージのずれなどが原因の場合、言葉や行動で互いのイメージを調整し合うことによって共有されたという意識に至る場合	—	—	
⑦-b 言語的説明	対立の原因について言葉で説明し、互いの意図を理解し合う場合	—	—	
⑦-c 決定方法の採用	互いに承認し得る解決策(じゃんけん等)を用いて対立を解決する	—	—	
⑦-d 妥協	対立する互いの意図を理解した上で妥協を示し、それに合意して解決に至る場合	—	—	
⑦-e 謝罪	規則違反やルール違反を指摘されて、自分の非を認め謝る場合	3 (11.5)	1 (1.3)	
		26 (100.0)	<**	77 (100.0)

註)・カッコ内の数字は全事例に占める割合をパーセントで示したものである。—は生起しなかったことを示す。

・不等号は $\chi^2$ 検定の結果、各観察期間で事例の数が有意に異なることを示す。(有意水準: $*p < .05$ , \*\* $p < .01$ )

以上のことから、4歳児では先行研究と同様に自己の不快な感情に気づくことができ、そのことを相手に表示することができるようになったと考えられる。その一方、先行研究においては年齢が上がると言語を用いた相互交渉を行うことによって、相手を受け入れたり互いが納得した上でいざこぎを終結させたりするようになることが示されていたが、本研究ではそのような傾向はあまり見られず、多数のいざこぎが「譲歩」することによって解決していた。これは互いに思いを伝え合うということより、初めは不快な感情を表すものの最終的には相手の要求を受け入れていることを示しており、相手の意見を受け入れ、互いが納得した上でいざこぎを終結させることができるようになったからだと思われる。さらに、「自然消滅」や「ものわかれ」による終結も増加しているが、3歳児では「ものわかれ」が2番目に多かったのが、4歳児ではその順位が逆転していた。4歳児では「自然消滅」の際、うやむやに終結する場合もあるが、いざこぎの途中でふざけたりおどけたりすることによって終結することがみられた。これはこれらの行動を行うことによって、いざこぎで生じた緊張を回復させようとしているのではないかと考えられる。

## 2. 各期におけるいざこぎの方略の特徴

3歳児と4歳児の各期に観察されたいざこぎの事例について方略を分類し、その頻度と割合を示したもののがTable3である。

いざこぎの解決過程において使用された方略は、3歳児において「拒否・拒絶」が25.8%と最も多く、次いで「主張」が21.3%、「抵抗」が11.2%と多かった。4歳児では「拒否・拒絶」が26.5%と最も多く、次いで「実力行使」が11.2%、「抵抗」、「受容」が10.8%と多かった。両期

Table3 各観察期におけるいざこぎで使用された方略の頻度とその割合

	内 容	3歳児	4歳児	(%)
a 実力行使	相手に対して身体攻撃を加えたり強引な手段を示すこと	3 (3.4)	<**	30 (11.2)
b 抵抗	相手の言動を否定することを行動で示すこと	10 (11.2)	<*	29 (10.8)
c 命令	命令すること	4 (4.5)		3 (1.1)
d 圧力	拒絶・謝罪したにも関わらず攻める言動すること	2 (2.2)		3 (1.1)
e 拒否・拒絶	相手の言動を否定すること。知らんふりやからかいなども含む	23 (25.8)	<**	71 (26.5)
f 主張	自分の主張を示したり、相手の言動に反論したりすること	19 (21.3)		22 (8.2)
g 先生	先生や友達に告げることを示すこと	—		2 (0.7)
h 依頼	相手に依頼していることを示すこと	—	<**	10 (3.7)
i 第3者へ依頼	当事者以外の第三者に同意を求めたりすること	—		—
j 指摘	「そんなことをしたら悪い。」等と指摘すること	4 (4.5)	<+	15 (5.6)
k 理由	「みんなに貸したら無くなるやん。」等と理由を示すこと	7 (7.9)		18 (6.7)
l 理由を聞く	「何で?」「どうして?」等と理由を聞くこと	4 (4.5)		6 (2.2)
m 独占	独り占めしていること	—		—
n 先取り	先に使っていたことを示すこと	—		—
o 使用目的	使う目的を示すこと	—		—
p 使用中	今使っていること、まだ使っていることを示すこと	—		—
q 規則	規則違反をしていることを示すこと	—	<*	6 (2.2)
r イメージ	ごつこの構成要素である役割、プラン、状況設定を言及する	5 (5.6)		10 (3.7)
s 提案	解決に向けての案を提示すること	1 (1.1)	<*	10 (3.7)
t 条件	時間的・量的な条件、または限定をすること	1 (1.1)		1 (0.4)
u 受容	相手の言動を受け入れること	4 (4.5)	<**	29 (10.8)
v 謝罪	規則違反やルール違反を指摘されて、自分の非を認めて謝る	2 (2.2)		1 (0.4)
w 相談	いざこぎにおいて、どう行動するか等を当事者以外の者も含めて話し合うこと	—		2 (0.7)
		89 (100.0)	<**	268 (100.0)

注)・カッコ内の数字は各観察期における総方略数に占める割合をパーセントで示したものである。—は生起しなかったことを示す。

・不等号は $\chi^2$ 検定の結果、各観察期間で事例の数が有意に異なることを示す。(有意水準: $+p < .10$ ,  $*p < .05$ ,  $**p < .01$ )

を比較すると3歳児ではみられなかつた「規則」がみられるようになった。

各観察期における方略を $\chi^2$ 検定で比較すると、「実力行使」が1%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた( $\chi^2=13.27$ , df=1)。同様に、「拒否・拒絶」、「受容」、「依頼」が1%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた(それぞれ $\chi^2=13.11$ , df=1;  $\chi^2=11.06$ , df=1;  $\chi^2=6.67$ , df=1)。また、「抵抗」が5%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた( $\chi^2=4.92$ , df=1)。同様に、「提案」、「規則」が5%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた(それぞれ $\chi^2=4.42$ , df=1;  $\chi^2=4.00$ , df=1)。「指摘」は有意ではないが、4歳児でより多く使用される傾向が示された( $\chi^2=3.48$ , df=1)。

以上のことから、3歳児では他者感情推論能力がまだ十分発達していないため、自己主張的な方略を多く用いているといえよう。また、4歳児では自己の感情を認識できるようになり、相手が自己の意思と異なる言動を行つた場合には、はつきりと「抵抗」や「拒否・拒絶」を示し、相手に悪い点がみられた場合はその点を「指摘」できるようになったといえる。同時に相手に「依頼」したり、「提案」したりすることによって、相手の意見を確認したり尊重したりしようとしているのではないかと推測される。また、「規則」に準じた善悪の判断をし、それを相手に伝えることもできるようになったといえる。その反面、4歳児においても他児との調整が上手くできない場合には、「実力行使」を行うことによって直接的にいざこざを解決しようとしていることが示された。

### 3. いざこざの解決事例において用いられる方略の特徴

いざこざの終結カテゴリーで「譲歩」、「イメージの共有」、「言語的説明」、「決定方法の採用」、「妥協」、「謝罪」に当てはまる事例を解決事例としてまとめた。3歳児は26事例のうち6事例、4歳児は81事例のうち38事例が当該事例であった。各観察期におけるいざこざの解決事例において使用された方略の頻度とその割合をTable4に示す。また、4歳児においてその際に使用された方略の推移と全方略における割合をTable5に示す。

いざこざの解決事例において使用された方略数は、3歳児では25、4歳児では122であった。1事例当たりの平均方略数は3歳児が4.17(SD:1.47)、4歳児が3.21(SD:3.59)であった。

使用された方略は、3歳児において「拒否・拒絶」が24.0%と最も多く、次いで「主張」が20.0%、「理由」が16.0%と多かつた。4歳児では「拒否・拒絶」が28.7%と最も多く、次いで「受容」が18.9%、「理由」が8.2%と

Table4 各観察期におけるいざこざの解決事例で使用された方略の頻度とその割合 (%)

	3歳児	4歳児
a 実力行使	—	<*
b 抵抗	2 (8.0)	8 (6.6)
c 命令	2 (8.0)	3 (2.5)
d 圧力	2 (8.0)	—
e 拒否・拒絶	6 (24.0)	<**
f 主張	5 (20.0)	7 (5.7)
g 先生	—	1 (0.8)
h 依頼	—	4 (3.3)
i 第3者へ依頼	—	—
j 指摘	1 (4.0)	<+
k 理由	4 (16.0)	10 (8.2)
l 理由を聞く	1 (4.0)	2 (1.6)
m 独占	—	—
n 先取り	—	—
o 使用目的	—	—
p 使用中	—	—
q 規則	—	—
r イメージ	—	1 (0.8)
s 提案	1 (4.0)	<+
t 条件	—	—
u 受容	—	<**
v 謝罪	1 (4.0)	1 (0.8)
w 相談	—	1 (0.8)
総方略数(%)	25 (100.0)	<**
解決事例数	6	38

註)カッコ内の数字は各観察期における総方略数に占める割合をパーセントで示したものである。—は生起しなかつたことを示す。

・不等号は $\chi^2$ 検定の結果、各観察期間で事例の数が有意に異なることを示す。(有意水準:+p<.10, \*p<.05, \*\*p<.01)

多かった。両期を比較すると3歳児ではみられなかつた「依頼」がみられるようになつてゐた。

各観察期における方略を $\chi^2$ 検定で比較すると、「受容」が1%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた( $\chi^2=15.33$ , df=1)。同様に、「拒否・拒絶」が1%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた( $\chi^2=11.72$ , df=1)。また、「実力行使」が5%水準で有意であり、4歳児に多く使用されていた( $\chi^2=6.00$ , df=1)。「提案」「指摘」は有意ではないが、4歳児でより多く使用される傾向が示された(それぞれ $\chi^2=3.81$ , df=1;  $\chi^2=3.21$ , df=1)。

以上のことから、3歳児では全事例のうち23.1%のいざこぎが解決されたが、4歳児では46.9%のいざこぎが解決事例となつてゐることがわかる。解決した事例においては3歳児、4歳児ともに初めは自分の不快な気持ちを表すために相手を拒絶している。その後3歳児は自分の思いを通そうとするため、主張を繰り返すうちに解決するが、4歳児では「提案」や「受容」を方略として繰り返し用いることによつて、自分の思いを伝えながらも相手の意思を尊重した場合において、いざこぎが解決に至つてゐるのではないかと考えられる。

#### 4. いざこぎの原因と終結の関連における特徴

4歳児におけるいざこぎの原因と終結の関連を示したもののが、Table6である。

原因が「物の占有」の場合、「譲歩」で終結することが18.5%と最も多かつた。原因が「遊びの一環」の場合は、「譲歩」で終結することが9.9%と最も多く、次に「自然消滅」が6.2%であった。

以上より、4歳児では先取りや所有の意図を理解することができるため、自己の所有している物または使用したい物が他児と重なつてしまつた場合は、他児の主張を受け入れたり、所有

Table5 4歳児におけるいざこぎの解決事例で使用された方略の推移

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	(%)
a 実力行使	4 (3.3)	1 (0.8)	2 (1.6)	1 (0.8)	—	—	1 (0.8)	—	—	—	—
b 抵抗	2 (1.6)	4 (3.3)	2 (1.6)	—	—	—	—	—	—	—	—
c 命令	1 (0.8)	—	2 (1.6)	—	—	—	—	—	—	—	—
d 圧力	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
e 拒否・拒絶	26 (21.3)	1 (0.8)	3 (2.5)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—	—
f 主張	5 (4.1)	—	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—	—	—	—	—	—
g 先生	—	—	1 (0.8)	—	—	—	—	—	—	—	—
h 依頼	2 (1.6)	1 (0.8)	—	—	—	—	—	1 (0.8)	—	—	—
i 第3者へ依頼	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
j 指摘	5 (4.1)	1 (0.8)	—	1 (0.8)	1 (0.8)	—	—	—	—	—	—
k 理由	7 (5.7)	—	1 (0.8)	—	—	—	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—	—
l 理由を聞く	1 (0.8)	1 (0.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
m 独占	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
n 先取り	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
o 使用目的	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
p 使用中	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
q 規則	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
r イメージ	—	—	—	—	—	—	—	—	1 (0.8)	—	—
s 提案	1 (0.8)	1 (0.8)	3 (2.5)	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—
t 条件	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
u 受容	—	14 (11.5)	—	6 (4.9)	1 (0.8)	1 (0.8)	—	1 (0.8)	—	—	—
v 謝罪	—	1 (0.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
w 相談	1 (0.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
総方略数	55	25	15	10	4	3	3	3	3	1	—

註)・カッコ内の数字は各観察期における総方略数に占める割合をパーセントで示したものである。—は生起しなかつたことを示す。

・不等号は $\chi^2$ 検定の結果、各観察期間で事例の数が有意に異なることを示す。(有意水準: $+p < .10$ ,  $*p < .05$ ,  $**p < .01$ )

の権利を示す  
ことができる  
ようになって  
いることが示  
唆された。ま  
た、相手に悪  
意があるかど  
うかという他  
児の感情や行  
動の意図を理  
解できるよう  
になるととも  
に、自分の行  
動が相手に不  
快をもたらし

	Table 6 4歳児のいざこざにおける原因と終結の関連表 (%)						
	(2) 抵抗	(3) 自然消滅	(4) ものわかれ	(5)-a 譲歩	(5)-b 圧力への服 従	(6)-c 子どもの介 入	(7)-e 謝罪
①-a 物の占有	—	—	4 (4.9)	15 (18.5)	1 (1.2)	—	—
①-b 場所の占有	—	2 (2.5)	—	—	1 (1.2)	—	—
② 人の独占	—	—	—	—	—	—	—
③-a 否定的な行動	2 (2.5)	3 (3.7)	2 (2.5)	—	—	—	—
③-b 無視	—	—	—	1 (1.2)	—	—	—
③-c 拒否・拒絶	—	1 (1.2)	—	—	—	—	—
③-d 反論・反発	—	1 (1.2)	—	1 (1.2)	—	—	—
③-e 遊びの一環	—	5 (6.2)	1 (1.2)	8 (9.9)	—	1 (1.2)	1 (1.2)
③-f 不当な要求	—	—	—	—	—	—	—
④-a 優越的規則違反	—	1 (1.2)	1 (1.2)	1 (1.2)	—	—	—
④-b 慎意的規則違反	—	1 (1.2)	—	1 (1.2)	—	—	—
⑤ イメージのずれ	—	3 (3.7)	4 (4.9)	3 (3.7)	—	—	—
⑥ 決定の不一致	1 (1.2)	1 (1.2)	1 (1.2)	3 (3.7)	—	—	—
⑦-a 接触	—	2 (2.5)	—	—	—	—	—
⑦-b 接近	—	—	—	2 (2.5)	—	—	—
⑦-c 妨害	—	2 (2.5)	—	4 (4.9)	—	—	—

たことが理解できるようになったために、相手の行動を受け入れることによって強引な終結の仕方を避けようとしているのではないかと考えられる。その一方で、4歳児は互いにイメージを持って遊んでいる場合には、相手のイメージに自身の意識を近づけたり、相手にイメージを上手く伝えたりすることが難しいため、互いの意見を調整することができずに終結に至るのではないかと推測される。

## まとめ

いざこざの解決過程において使用される方略について、3歳児と比較すると4歳児はいざこざの解決過程で相手の意図を理解し、受容することによっていざこざを解決しようとしており、他者感情推論能力がより発達していることが明らかとなった。一方で、4歳児においても身体攻撃的な方略が用いられているが、これは自己の意思を押し通そうという身体攻撃的な方略や自己の意思を示すための言語的な方略を、その場に応じて使用するという従来の研究で示された4歳児の特徴に近いものであるといえよう。

本研究においては、特定の子どもが周りの子どもに対して嫌がらせのような行動を行っているが、それは他者感情推論能力の発達に伴い、自己の行動が他児にどのような影響を与えるのか反応を確認しているものであるとも推測される。この行動がどのような意味を持ち、今後どのように変化していくのか検討していく必要があるだろう。

今回は量的な分析を行うことによって、3歳児および4歳児におけるいざこざの発達的变化を明らかにすることができたが、子どもたちは相手の表情や雰囲気などもいざこざを解決させるための重要な手がかりとして考慮していると考えられる。そのため、今後は事例の質的な分析も合わせて実施し、更に検討を深めていくことが必要であろう。

## 引用・参考文献

- ・阿南寿美子・安部奈々子・糸永珠里・松尾明子 1998 幼児におけるいざこぎの解決過程の発達的検討 1997年度大分大学教育学部卒業論文
- ・阿南寿美子・西村薰・田中洋 2007 a いざこぎの発生と解決過程における年代変化 別府溝部学園短期大学紀要第 27 号 pp. 17-25
- ・阿南寿美子・田中洋 2007 b 幼児におけるいざこぎの解決過程の発達的検討—高頻度児と低頻度児との比較— 第 68 回九州心理学会大会発表
- ・阿南寿美子・田中洋 2008 いざこぎの発生と解決過程の事例による検討—3 歳児と 4 歳児の比較— 別府溝部学園短期大学紀要第 28 号 pp. 27-36
- ・平林秀美 2003 子どものいざこぎをめぐって—社会性の発達の視点から— 東京女子大学紀要論集 53 卷(2) pp. 89-103
- ・堀越紀香 2003 ふざけ行動にみるちょっと気になる幼児の園生活への対処 日本保育学会 保育学研究 遊びと学習 第 41 卷第 1 号 pp. 71-79
- ・木下芳子・斎藤こずゑ・朝生あけみ 1985 3 歳児における「けんか」の成立と発展 日本教育心理学会発表論文集 第 27 卷 pp. 284-285
- ・木下芳子・斎藤こずゑ・朝生あけみ 1986 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達—3 歳児におけるいざこぎの発生と解決— 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学)(I) 第 35 卷 pp. 1-15
- ・倉持清美 1992 幼稚園の中のものをめぐる子ども同士のいざこぎ—いざこぎで使用される方略と子ども同士の関係— 発達心理学研究 第 3 卷 第 1 号 pp. 1-8
- ・倉持清美・柴坂寿子 1997 ラブレルの少ない幼稚園生活をおくる子ども 日本保育学会発表抄録 pp. 704-705
- ・無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ 2004 「質的心理学-創造的に活用するコツ-」 新曜社
- ・中川三和・山崎晃 2004 幼児の対人葛藤が遊びに与える影響 幼年教育研究年報第 26 卷 pp. 61-68
- ・荻野美佐子 1986 低年齢児集団保育における子ども間関係の形成、無藤隆・内田伸子・斎藤こずゑ 「子ども時代を豊かに 新しい保育心理学」 学文社 pp. 18-58
- ・Shantz, C.U. 1986 Conflict, aggression, and peer status:An, observational study. Child Development, 57, pp. 1322-1332
- ・Shantz, C.U. 1987 Conflicts between children. Child Development, 58, pp. 283-305
- ・高濱裕子・無藤隆 1999 仲間との関係形成と維持—幼稚園期 3 年間のいざこぎの分析— 日本家政学会誌 vol. 50 NO. 5 pp. 465-474
- ・田中洋・阿南寿美子・安部奈々子・糸永珠里・松尾明子 1999 3 歳児におけるいざこぎの発生と解決過程 大分大学教育福祉科学部研究紀要第 21 卷第 2 号 pp. 357-368

## The Analyses of the Development of the Cause and Interaction Process of Peer Conflict —A Comparison between 3-year-olds and 4-year-olds —

TANAKA, Hiroshi and ANAMI, Sumiko

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the developmental differences of the cause and interaction process of peer conflict between 3-year-olds and 4-year-olds. Seven boys and 12 girls (whose average age was 5 years and 5 months and whose standard deviation "SD" 2.05 months) were observed in the free play situation. They were also observed in the class of the 3-year-old subjects (whose average age was 4 years and 4 months and whose SD 3.35 months).

As a result, it was suggested that there were differences between 3-year-olds and 4-year-olds in the cause and interaction process of the peer conflict. In the cases of the peer conflict of 4-year-olds, it was suggested that the frequency of "problem-solving case" increased from 6 (23.1 percent) to 38 (46.9 percent) by comparison with that of the 3-year-olds. Moreover, it was suggested that "proposal strategy" was used more often than any other strategy was. Finally, it seemed that the 4-year-olds had developed social abilities more remarkably than the 3-year-olds had.

【Key words】 Peer conflict Strategy Category Social development